

六斎保存の現状 と担い手の課題



様々な理由で六斎から離脱

学校やクラブ活動、習い事などで、時間が取れなくなった子どもは、自然と練習会に参加しなくなり、さらに、中学生になるとクラブ活動への影響や進学塾に通うなどで関心の希薄化による離脱が見られます。

子どもたちにとって練習会は、楽しむ場としての意味が強く、六斎以外に自己表現につながるものが出て来た場合に、六斎からの離脱が生じると考えられます。また、保存会の厳しい指導、怒られたり、他のことに関心が移行して飽きてしまう場合や、人前に出ることには恥ずかしさを感じるようになる場合もあります。

競争意識（ライバル心）の芽生え

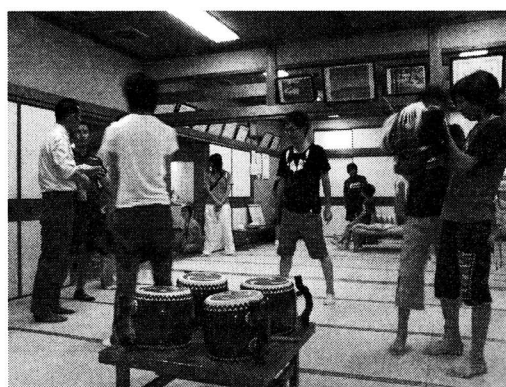
子どもたちは、練習の成果で技術が向上することによって、上手に太鼓が叩けるようになることや、友達より上手に太鼓を叩きたい、また、祖父の影響で幼稚園から太鼓を叩いている子どもは、他の友達には負けられないというライバル心が芽生えはじめます。

例えば、四つ太鼓で最後に叩くのを「上げ」といい、太鼓で花形とされ、年齢に関係なく実力のある子どもが最後の「上げ」を取ることになります。指導にあたる学校の先生からは、そのことを子どもたちに納得させるのが難しいといます。特に、教育的な

配慮が出来にくく、実力主義やライバル意識のところの指導が難しいといます。保存活動に参加するかしないかは、子どもたちの自由で、今は町内会も絶対的な影響力を持ってないため、六斎に参加することはあまり強制的に出来ません。遊びやゲーム、習い事の多様化で何を学ぶか、何を楽しむかも自由で、その受け皿となる学校以外の学習や趣味の場と同じように、子ども六斎会が存在します。

六斎に参加する理由としては、自己実現を通じた楽しさが重要になります。指導する立場で、どのように楽しく練習させるかの工夫をしなければなりません。

現在、子ども六斎会には、周辺地域からも参加しており、地域文化に関わりたいという子どもたちも徐々に現れていますので、NPOが実施する「六斎体験教室」や、研究会の「六斎寺子屋」などで、いかにして楽しく参加するかなど工夫をしていく必要があります。



リーダー育成の形成

子ども自身が自主性や主体性を持ち、六斎保存会や獅子の如くの活動を通して、リーダー育成を視野に入れることも重要な一つと考えています。

これまで解放運動をはじめ、人権・教育・文化・安全安心など、まちづくりに携わる中で、理想とする組織リーダー像は、状況によってリーダーを交代するという事です。これまで解放運動に携わり、運動によって学んだ経験からです。現在、社会やNPOなどの組織は、複雑かつ急激な状況が変化する中、果たして一人のリーダーがすべての問題を引き出し、組織としてまとめて行くことが出来るのかという疑問がありました。そこで、これまでの経験で感じたのが専門分野制でした。

当時、NPO組織を立ち上げたという責任感もあり、自分一人で強固な組織をつくるのが使命だと考えていました。組織の根幹をなすのは、人の力が重要でした。人がしっかりしていなければ、強い組織はつくれません。

組織の基盤となる自立する人をどうまとめるかを常に念頭におきました。

組織全体を収集しての会議や、個々のモチベーションアップのための情報収集、あるいは各専門部別で会議を開くなど、各部門でまとまりを重視することを心がけました。しかし、その専門部体制では、組織全体のバランスが崩れる恐れもありました。周囲から「リーダー放棄」「職務怠慢」等々、組織事態に亀裂が出ることもありました。

専門部別体制を確立することで、自立した人が集まる組織づくりに取り組むことで、知識を吸収する柔軟性、総合的な組織力の向上につながることを意識し、組織建設に取り組むことができたと考えています。

解放運動の先輩からリーダーについて何うと、解放運動やまちづくり等、しっかりしたビジョンを持たない人には、リーダーは無理と話されのが印象に残っています。

ビジョンや能力があれば、例え若くてもリー



吉祥院天満宮六斎奉納にて

ダーにするという。若い熱意のある者にやらせることで、その組織の活性化につながるという発想です。

地域の伝統文化の「技」を育てるとともに、六斎を理解し、社会に発信する人材を育て、いわゆる学芸員のような歴史的意義を伝える役割を担う伝承者を育成することも研究会の使命でもあると考えています。

六斎の歴史や思想、理論を習得し、価値付ける力を育てる必要があります。

公演やワークショップの企画、パンフレットや広報誌などの発信力を鍛える他、文化交流を図り、保存会を支え、企画、発信していく人材が欠かせません。六斎が息づく吉祥院の地の利を生かしていきたいと考えています。

現在、獅子の如くの会員に六斎の活性化を目指す熱意の持った若い会員が徐々に集まりつつあります。

近い将来、次世代にバトンを渡して、獅子の如くや六斎保存会を引っ張っていける若いリーダーに託したいと考えています。